

絵本をもとにした子どもとの対話的表現活動の実践

～対話的表現活動での遊び学びについて～



九州大谷短期大学幼児教育学科2年

岩村祐里・川口万理菜・猿渡杏実・高橋友香利・
立花透真・田中亜侑・堤紫音・升永浩平

題材とした絵本：『はらぺこあおむし』

文・絵：エリック＝カール

訳：もりひさし

出版社：偕成社、児童書出版社

出版年：1969年6月3日

タイトル：「はらぺこあおむし」

配役：あおむし①（岩村祐里）、あおむし②（川口万理菜）、あおむし③（高橋友香利）、あおむし④（升永浩平）、太陽、月（立花透真）、ナレーション及び撮影（田中亜侑）、BGM（堤紫音、田中亜侑）；プロデューサー（田中亜侑）、カメラ・音（猿渡杏実、堤紫音）、報告書（岩村祐里）

1. 題材「はらぺこあおむし」選定の理由

この絵本のストーリーは次のようなものである。

はらぺこあおむしは、あおむしが卵から産まれてきてお腹が空いて、月曜日にりんごを1つ、火曜日になしを2つ、水曜日にすももを3つ、木曜日にいちごを4つ、金曜日にオレンジを5つ食べるが、それでもあおむしはまだまだお腹が空いている。そんなあおむしは土曜日に、チョコレートケーキ、アイスクリーム、ピクルス、チーズ、さらみ、ペロペロキャンディー、さくらんぼパイ、ソーセージ、カップケーキ、スイカを食べて、お腹が痛くなる。そしてあおむしは1枚の葉っぱを見つけ、葉っぱを食べてお腹がすっきりして何日も眠り、さなぎになった後、きれいな蝶々になって飛ぶ物語だ。

この物語には、子どもが好きな虫や蝶々がどのような過程で産まれるのかという新しい学びや、丁度子どもたちが経験するだろうたくさんの事象を含んでおり、「なりきり遊び」「色彩遊び」「表現活動」など、日常生活の中への遊びの展開が創造しやすいヒントがたくさんあると考えた。また、「はらぺこあおむし」という題材は、ストーリーが単純であるため分かりやすく、この絵本を通じて「なりきり遊び」「表現遊び」で、卵や蝶々になりきって自分で自由に表現して楽しむことができると思う。

はらぺこあおむしの作者が絵本を作る上で色々な紙を切ったり貼ったりして、独特な色彩使いをしていることから「色彩遊び」では、1枚の色々な絵から見えてくる色々な物や食べ物を想像して、楽しむことができる。また、この題材は、ストーリーだけではなく、4.5歳児の子ども達に適した平易な構成になっていることから、子どもの発達段階に合わせた取り組みや絵本である。

以上のことから、「はらぺこあおむし」は私たちのテーマである「絵本を通じて楽しめる遊び」を4.5歳児に体験してもらうことに適している本題材と考え選んだ。

（猿渡杏実）

2.絵本の世界を楽しむために、対話的な活動として設定した遊び

この題材において、私達は子ども達に絵本の中のおおむしになりきって、なりきり遊びや色彩遊び、表現活動を楽しんでほしいと考えた。また、絵本の内容から子ども達に伝えたいことを考えた。そのため、対話的な活動として以下の遊びを考えた。

- ・なりきり遊び

これは、画面の中で私達が卵になりきり、生まれるところを子ども達もテレビの中の人と同じようになりきって遊ぶことを設定する。このことは、画面の向こうにいる子ども達にとっても、友達と一緒に楽しんで遊ぶ。

- ・色彩遊び

これは、絵本の中にある果物や食べ物などの色を使って、どんなものに見えるかを楽しむ。赤一色ではなく、薄い赤や濃い赤少し暗めの赤や明るい赤など様々な色からどんなものが連想されるかを楽しむことで、想像力を使って遊ぶことを想像した。

- ・表現遊び

絵本にある卵や卵の中のおおむし、蝶や蛾になりきって、どんなふう動いているのかや飛んでいるのかを実際に体を使ったり、自分の頭の中でイメージしていることを体を十分に使ったりして遊ぶ。

- ・音遊び

卵が割れる時に出るピアノの音や蝶々が飛んでいる時に流れる童謡で遊ぶ。子ども達が楽しくリズムに乗って遊べるように、3回目は音階を1オクターブあげて弾く。そうすることで、子ども達が音の変化も楽しみ、遊べる。

(田中亜侑)

3.対話的表現活動で大切にしたこと

対話をする上で大切にすることは、子どもから返ってくる返事を決めつけすぎないことだ。子ども達の返事を決めつけてしまうと、臨機応変に対応できなくなるからだ。そのため、練習の時から裏方役が毎回違うことを言うなどして、言ってほしい言葉が出てこなくても対応できるようにし、リモートということもあり、通信状況の問題などで子ども達の返事がうまく聞き取れない時があるため、出来るだけ「うん。」か「いいえ。」のどちらかで答えることができるようにした。そうすることで、子ども達の声が聞こえてなくても、首の動きなどを見て、対応することができた。目の前で子どもと対話をするわけではないため、出来るだけわかりやすい言葉選びをすることを心がけた。そして、早く話していると聞き取れないこともあるため、できるだけゆっくり話すことを意識した。また、子どもの返事が返ってくるまでに時差があるため、なるべく問いかけた後は時間を取るように工夫した。

(岩村祐里)

4.内容について

(1) 全体の構成

まず最初に、リモート先の子どもたちにオンラインで繋がっている事の実感を持ってもらうことを意識して挨拶をする。その後活動の導入として、絵本の読み聞かせと色絵を使って対話的活動を行う。

次に、絵本のストーリーをわかりやすく劇にして子どもたちと表現活動を楽しむ。

最後に、活動のまとめとして簡単にできる遊びを紹介したり、自分たちの伝えたいメッセージを話したりして活動を終える。

①挨拶

②はらぺこあおむしの絵本の読み聞かせ【下写真】



③色絵が何の食べ物に見えるか質問する【下写真】



④卵になってみる(園の子ども達も)

⑤ゴロゴロと卵が動く(園の子ども達も)

⑥卵の気持ちを聞いてみよう

⑦卵から産まれる(園の子ども達も)

⑧お腹が空いたので好きな食べ物を聞く(園の子ども達に)

⑨食べ物探し(個数をきちんと見てもらう)【下写真】



⑩土曜日に食べたものの紹介【右写真：食べ物の絵】



- ⑪葉っぱを食べる(スッキリして寝る)
- ⑫さなぎ(サナギの中の様子を見てもらう)
- ⑬蝶になる(園の子ども達も)【下写真：不織布に色付けして作成した蝶の羽】



- ⑭蝶の羽のアピール・特徴紹介
- ⑮園のみんなと一緒に蝶になって飛ぶ
- ⑯園でも蝶の羽を作って遊んでみてねと呼びかける
- ⑰お礼を言って挨拶をする

(川口万理菜)

(2) 子どもたちとの対話について

①色彩遊び

色彩遊びについては、濃い赤色や薄い赤色、ピンクやオレンジのような赤色といった様々な赤に近い色から様々な食べ物を子ども達に伝えてもらうというような対話をした。その中で、子ども達が「トマト」や「りんご」、「みかん」など食べ物を挙げていくと、子ども達が伝える食べ物を繰り返し言い、それを即興で食べ物のイラストを描く遊びを考えた。この事で、1つの色でも様々な食べ物が想像できることを体験してもらった。

②なりきり遊び・表現遊び

なりきり遊びについては、卵が出てきた後、身体を小さくして卵になりきったり、手や腕を上下に振り、保育室を駆け回って、蝶々や蛾になりきったりして対話をした。その中で、たまごや蝶々・蛾になりきる前に、「変身。」と言うのをきっかけにして、子ども達1人ひとりが自分なりの卵や蝶々・蛾になって遊んだ。子ども達一人ひとりの卵や蝶々を表現する楽しさを感じてもらった。

③言葉での遊び

蝶々や蛾の羽をあおむし役だった人達が、自分の羽を子ども達に説明した。その中で、食べた物(すももやチョコレートケーキ、サラミなど)を具体的に挙げていったり、子ども達が反応をしやすいように形容詞(可愛い、かっこいいなど)を使ったりして、子ども達に問いかける。その後、「可愛い。」や「かっこいい。」といった子ども達の反応があった。子ども達に言葉で思ったことを表現する楽しさを感じてもらった。

④音遊び

卵の割れる音を何回か聞いてもらった後、子ども達に卵になりきるように促した。その後、ピアノの卵の割れる音に合わせて、子ども達が自分なりのあおむしになりきった。

また、蝶々になりきって飛ぶところでは、1回あおむし役の人達が音に合わせて飛ぶところを子ども達に見てもらい、子ども達も一緒に飛ぶよう促した。その後、子ども達が蝶々のピアノの音に合わせて楽しんだ。

このことを踏まえて、子ども達に音に合わせて遊ぶ楽しさを体験してもらった。

(高橋友香利)

(3) 演出の工夫 (道具や見せ方)

あおむしの4人がしっかり画角に入るように、カメラからの距離をしっかりと測る事で、見えやすくした。

はらぺこあおむしでは、食べ物が沢山出てくるので、一つ一つ実際に作ったり、大きな段ボールに画用紙を貼り、大きな絵を描く事で見やすくしたりした。色を塗る際も一色で塗るのではなく、はらぺこあおむしの絵本のように、何色も重ねて塗りをした。また、曜日や個数などをわかりやすくするため、手で持って見えやすくするなど工夫をした。

絵本の読み聞かせでは、ライトの具合で反射しないよう角度を調整するなどして、見えやすくなる工夫をした。

(立花透真)

(4) 音と音楽

今回、様々な場面の様子をよりよく表現するために、以下の工夫をした。

①導入と劇の区切りを付けるためや、夜だということ表現するために「ねむりのうた」を弾くようにした。

②ピアノで卵が割れる音を表現した。蝶が飛び回る際に「ちょうちょ」を弾くことによって、劇と関連付けた音楽を取り入れて子ども達にリズムや音を使って楽しんで活動出来るようにした。また、蛾の羽を蝶々と違う素材を使うことで羽の音を表現し、音を楽しむ工夫をした。

(堤紫音)

(5) プレ・パフォーマンスにおける子どもの姿と省察

始まりの絵本の読み聞かせを静かに聞いていた事が印象的であった。何が始まるのかドキドキしていたと思われる姿がプレ・パフォーマンスでは、緊張した子ども達の姿を見ることが出来た。

導入が終わるとあおむし(自分達)の動きを画面越しに真似していた。みんなそれぞれ自分の動きがあり、走り回ったり、静かに動いたりする子どももいた。また、子ども達の動きに合わせた言葉掛けを臨機応変にすることで、よりコミュニケーションを図ることができた。私達だけでなく、見ている子ども達も緊張することが分かったので、導入だけでなく全体の中で対話を大切にしよう心掛けることが必要だと感じた。

(堤紫音)

(6) 取り組む過程での改善と工夫

今回のはらぺこあおむしの絵本から遊びへと展開し、対話的表現活動をする中で改善した点は、以下の3つです。

①子ども達も一緒に巻き込めるようにセリフを考える。

- ・あおむしが卵の中にいる時、子ども達も一緒に卵になりきったり、卵から生まれたりするように、「～してみて。」と動きを促すようなセリフで子どもたちに伝える。
- ・蝶々になりきって飛ぶように遊ぶ際、ナレーションで、「みんなも蝶々に変身。みんなも一緒に飛んでみてね。」と、子ども達に伝える。

②一連の流れやセリフをうろ覚えなところがあるため、しっかり覚えるようにする。

- ・全員で繰り返し一連の流れを練習する。
- ・変更したセリフや動きを入念に確認する。
- ・覚えられないセリフや間違えたセリフを繰り返し練習する。

③モニターを見てしまうため、カメラを見るように意識する。

- ・リハーサル後に、全員でカメラをよく見るよう確認する。
- ・本番やリハーサルの最中に、カメラから目線が外れていたら、カメラ担当の人など裏方の人達があおむし役の人達に、カメラを見るよう身振り・手振りをして伝える。

また、工夫した点は以下の2つです。

①果物の数が子ども達にも分かるようにする。

- ・月曜日から金曜日に出てくる果物を子ども達に見えるよう、前に出して数を分かりやすくする。
- ・りんごを1つ、なしが2つ、すももを3つ、いちごを4つ、オレンジを5つといったように、果物をその数に合わせて用意する。
- ・数字を子ども達に伝える際、声を大きくしたり、言葉と言葉の間に間をおいたりして、数字を強調する。

②あおむしが実際に食べているような表現をする。

・土曜日の食べ物を紙に一つひとつ描き、その描いた絵の1枚を半分に分けて、食べた様子を表現する。

・食べ物を食べた感想を言葉で表現する。

(甘くて美味しいや冷たい、とろける、大人の味がするなど。)

・食べ物を食べる時の咀嚼音を言葉で表現する。

(あむあむあむやパクパク、むしゃむしゃなど。)

③はらぺこあおむしの絵本の物語を楽しむことができるような流れにする。

・最初にはらぺこあおむしの絵本を読む。

(話を知らない子どもでも、表現活動に楽しく参加できるようになる。)

・はらぺこあおむしの話の流れにそって、表現活動が進む。

(太陽や月が出ることによって、朝から夜といった時間の流れを感じることができる。)

(日曜日から1週間あおむしが何を食べたかということや曜日を子ども達に伝えることによって、1週間とはどのぐらいなのかを感じることができる。)

以上のことを実践することによって、子ども達の表現活動が広がり、子ども達も私達も一緒に、自由な対話的表現活動を楽しむことができた。

(升永浩平)

(7) 子どもたちの様子と表現

①なりきり遊び

卵からさなぎや蝶々・蛾になるまでの過程を子ども達と一緒に身体を使って、なりきり遊びをしました。あおむしが卵になっている時や蝶々・蛾になって飛び立つ時に、卵の中で動いていることを表現したり、蝶々が飛び回っているところを想像して、保育室内を駆け回ったりなど、子ども達が自分達なりの卵や蝶々になりきって、表現した。

②色彩遊び

複数の色を重ねてできている赤い色の絵を見て、子ども達一人ひとりが食べ物を想像し、食べ物を私達に伝えていた。また、子どもによっては、丸い食べ物(トマトやりんごなど)を伝える時には、身振り・手振りをしながら表現した。

③音遊び

卵から生まれてくる直前にピアノの音が鳴り、あおむしが出てくる場面がある。その際、ピアノの音がすると、子ども達は「何。」や「何かピアノの音が聞こえた。」と言って、指をさしたり、スクリーンに注目したりしていた。また、子ども達が蝶々になり、保育室内を駆け回る時にピアノの音を鳴らしていると、子ども達はその音に合わせて、蝶々が飛ぶという想像をし、ゆっくり飛んでみたり、速く飛んでみたりした。

(高橋友香利・堤紫音)

5.取り組みを通して得たこと

【岩村祐里】

幼教こども劇場で「はらぺこあおむし」を題材に遊びやオリジナルの表現を加えて演じた。その中で私はあおむし役をした。最初は役になりきるのが恥ずかしくなかなか大きく表現したり、セリフを言ったりすることが嫌だった。しかし、プレパフォーマンスをした後に、子ども達は私達が恥ずかしがりながらやってるなんて思っていないし、セリフを間違えて笑ってるのを見てなんで笑ってるんだらうってしか思っていないことに気がついた。それがきっかけで、子ども達がお話に引き込まれるような作品にしたいと思い、セリフを多くしたり、子ども達との対話を多くしたりなど少しでもいい作品ができるようにと工夫した。そうしたことで、本番では子ども達のいい反応を見ることが出来た。

また、計画を立てずに作業をした。そのためギリギリになってないものに気づき、先が思いやられる時もあった。そのため、いつまでに何をやる、また誰が製作をして、誰が絵コンテや台本を作るなど作業を手分けする必要があったと思った。制作が途中だったり、台本がグダグダだったりしながら臨んだプレパフォーマンスでは、私達が思っている以上に子ども達の反応がなかったり、また予想していなかった所で反応があったりなど困惑するところもあった。しかし、プレパフォーマンスの反省点、改善点をもとにストーリーの流れを変えたりすることで本番では、私達が何を子ども達に伝えたいのか、何を子ども達とやりたいのかなどをしっかり伝えることが出来たんじゃないかなと思った。

今回「はらぺこあおむし」の作品をこのメンバーとするということで、距離が近いからこそ言いにくい部分などあり、揉める事もあった。しかし、作品を成功させるためにも、お互い思っていることを伝え、理解してもらうなど、最後までみんなで作品を作るからこそ子ども達の反応が良かった時に達成感があるんだと思った。最後までこのメンバーと作品を作ることが出来て良かったと思った。

【川口万理菜】

私たちは「はらぺこあおむし」の作品を通して子ども達に、あおむしは卵の中でどんな動きをしているのかや何を考えているのか、また、さなぎの中で何をしているのかや蝶になるまでの過程を伝えたいと思い、様々な工夫をした。卵は、中が透けて動きが良く見えるように、不織布を使うことで中の様子が想像しやすくなったと思う。蝶の羽は、それぞれ食べた物の色になるよう仕上げた。また、飾りを着けたり、蛾もいたり個性豊かになった。リハーサルの時点で改善点が多く、本番が成功するか不安だった。意見が交差したり、色々トラブルもあったりしたが、日に日に良くなっていくのを感じた。

幼教こども劇場(オンライン)の全体を通しての感想は、子ども達がどのようにしたら一緒になって楽しんでくれるのかを考えることが難しかった。子どもの目線に立ち、伝えたいことが伝わるにはどうしたらいいかなど、意見を出し合った。

本番を通して、私はゆっくり話すこととカメラを見て話すことを意識して行った。子ども達が楽しそうに一緒に遊んでくれたので、満足した。zoomで子ども達の反応を見て、とてもいい反応をしてくれていたので、私達も楽しかった。

【猿渡杏実】

今回の幼教子ども劇場を通じて、画面越しでの子どもとの対話的表現活動は子どもと離れているため、たくさんの工夫や練習が必要だと思った。

はらぺこあおむしの表現活動をする上で、まずしっかりと子ども達に何を伝えたいのか、なにを楽しんで欲しいのかを明確に決めて進めていくことが大切だと思う。また、年齢に合わせた声掛けや意欲的に取り組みたくなる活動を考えたり、画面越しであるため、物を作る場面でも大きく、見えやすい色を作ったり、工夫が必要だ。さらに、私達の声掛けに対して反応があるまで子ども達を待っていたり、子どものペースに合わせて進めたりしていく必要があると考えた。画面越しであるため、私達の声掛けが伝わっていなかったり、予想外の子どもの行動、反応があったりとして、うまく対応が出来なかったため、事前に起きそうな事や対応の仕方などしっかりと考えておいたり、臨機応変に対応できたりする力が必要だ。

今回の画面越しでの子どもとの対話的表現活動を行って、画面越しならではの画面の切り替えで実際に青虫の細かい動きや成長過程をカメラワークを通して表現することを工夫した。

また、この作品を作る上でチームとの連携、協力することはとても大切なことだ。

もっといい作品ができるようにたくさん話し合いや役割を決めたり、チームで協力したりしながら1つの作品を作り、楽しさや達成感が感じられる場面がたくさんあった。

今後保育士になる上でも、保育者同士の連携や協力体制を築くことで、行事や活動なども色々な意見を聞いたり、発言したりすることで新しい発見やよりよい活動にしていけるために必要だと感じた。

そして、保育士として子ども達の成長や安全を守る面でもとても必要なことだ。

【高橋友香利】

今回の「はらぺこあおむし」の絵本から、様々な遊びへと発展していく中で、3つのことが得られたと思う。

1つ目は、様々な表現の捉え方である。あおむしの卵を身体で表現する際、大人であれば身体を小さくして、丸い形を表現する人が多いと思う。しかし、子ども達は身体を丸くするだけではなく、頭を隠したり、腕や身体全体で卵の動きを表現したりなど、様々な表現をしていた。また、蝶々や蛾になりきり、子どもと一緒に飛ぶ場面があった。その際、ある子どもは保育室内を走り、駆け回っていたが、一方の子どもはその場で腕を上下に動かし、蝶々の羽の動きをしていた。このことを踏まえて、子ども達が1つのことを表現する時、子ども達それぞれ違う表現をすることがわかった。だから、子ども達一人ひとりの表現の捉え方を柔軟に受け入れることが大切だと思う。

2つ目は、自分の意見を簡潔に伝えることである。子ども達の表現活動をより良いものにしていくためには、意見を出すことが大切だと思う。その時、意見を簡潔に伝えなければ何を具体的に表現活動へと繋げられるかを明確にすることができない。実際、自分達でどのような遊びをするかを考える時、意見を簡潔にしていくことで、表現活動をどのように展開していくかを明確にすることができた。それらを実践することを通して、この「はらぺこあおむし」を成功させることができたと思う。

3つ目は、コミュニケーション技術を取り入れていくことである。子ども達は大きな動作や伝わりやすい言葉など、様々な動きや言葉から対話的表現活動を楽しむことができると思う。あおむしの食べた物を数える時のように、あえて沈黙する場面を取り入れたたり、ただ言葉で伝えるだけでは理解できない言葉でも、絵やイラストを用いたり、身振り・手振りをしながらセリフを言ったりなど様々な工夫をすることができた。それらを実践することによって、より子ども達の表現活動を広げることができたと思う。

以上の2つのことを踏まえて、保育者として大切な自由な表現活動をすることの大切さを学ぶことができた。だから、この表現活動の取り組みを保育者になる時に取り入れていきたいと思う。

今回の大谷幼教劇場では最善を尽くして、対話的表現活動することができたと思う。この取り組みをする途中、お互いの意見や考えが異なり、悩むことも多くあった。しかし、その中で相手の意見や考えを聴き、受け止めつつ、自分の意見や考えを伝えていくことができたため、本番を迎えることができたと思う。この取り組みを通して、相手の意見を傾聴・受容し、自分の意見を伝えていくことの大切さを学ぶことができた。このことを踏まえて、今後保育者として現場に出た際には、傾聴や受容、自分の意見を伝えていくことを実践していきたいと思う。

この対話的表現活動をグループでしていく中で、自分の役割に最善を尽くすといった責任感がとても重要だと学んだ。1人でも自分の役割を怠けると、他の人に負担がかかる。その状況だと、グループ内で連携がとれなくなるため、さらにより良い対話的表現活動を行うことができなくなると思う。このことを踏まえて、責任を持って自分の役割に最善を尽くすことで、子ども達の表現活動が広がるようになるのではないかなと思う。以上より、保育者として重要な責任感について、改めて見直すことができた。

【立花透真】

今回の大谷こども劇場でのzoomで、子ども達に絵本の内容を表現したり、画面越しで一緒に楽しむ事をしたりして、遠い場所から何かを見てもらうことや発表することの大変さを学んだ。また、子ども達に楽しんでもらえるための言葉かけや身振り・手振りといった非言語的コミュニケーション、「はらぺこあおむし」の太陽と月といった役としての表現の仕方が難しいことを知った。リハーサルを終えた後、先生方の指導があり、一つひとつの動作を大きくすることを意識したり、はらぺこあおむしの世界観を感じることができるよう、最初に絵本を読むなどの工夫をしたり、遊びへの展開をもっと具体的に、明確にしたりすることによって、子どもたちの表現活動がさらに広がっていくことを学んだ。

この取り組みを通して得たことは、普段と違う状況になった時、そのままやり通すのではなく、その状況に合わせて変えていくというような対応力である。本番1日目の最後に、子ども達から何度も「もう1回出てきて。」と言われた。その時、普段通りに終えるのではなく、子ども達が好きな蝶々になりきって飛ぶ場面をもう一度し、保育室の扉のほうへ行くよう促した。その後、子ども達は笑顔でそのまま外へと行った。このことを踏まえて、子どもたちが楽しみながら活動を終わられるように工夫していくことが大切だと思った。今回、その場に応じて臨機応変に対応する力を得た。だから、この対応力をさらに伸ばしていきたいと思う。

【田中亜侑】

私達ははらぺこあおむしという絵本を題材として、子どもたちとオンラインで対話的表現活動をすることにした。色々な色から食べ物を想像したり、卵になりきって遊んだり、あおむしがどうやって蝶や蛾になったりするのかを子ども達が楽しみながらわかるようにした。大きな技法としては、劇を取り入れ、その中で子ども達へ声かけや質問をすることで、対話的な遊びができるのではないかと考え取り組んだ。

練習や制作の過程では、必要な小道具がたくさんありそれをメンバーで役割分担して作ったり、本番までの日にちを逆算して練習に取りかかったりする中で、計画性の重大さや協力することの大切さを改めて感じる事ができた。

実際に子ども達は、画面の向こうにいるにも関わらず楽しんでくれたり、もっとやりたいと遊び込んだりすることができていました。その遊び込みをどう終わるかもメンバーの臨機応変な対応ができていたため、綺麗に終わることができていた。対面ではなくオンラインだったため、ゆっくり喋ることは大前提で、その上、子ども達が返答しやすいように「はい。」や「いいえ。」で、答えられる(閉じられた質問)をするようにしたり、身振り手振りをつけたりなど色々な工夫をすることが必要だと気づいた。子ども達に伝えたいこともしっかり言葉にすることを考え、わかりやすく伝えることを意識して活動した。また、今まで子ども達と直接関わる実習には行かせていただいたが、今回のようにオンラインで関わることを経験して、どちらの関わりでも共通していたのが、子ども達の行動に予想外のことが起こるということだ。私達が思っていることを超えた行動発言があるので、そこに臨機応変に対応できることが今回のオンラインでの活動でもこれから先の現場でも大切で、必要なことだと改めて感じる事ができ、今までの集大成として取り組む事ができた。

【堤紫音】

今回の幼教子ども劇場を通して、実際に実習などで子ども達と関わるのではなく、オンラインで画面越しに伝えるということが課題となり、伝え方などが難しいと感じた。裏方で子ども達の姿やメンバーの劇の動きを見て、小さな動きでも分かりやすく伝えるために、ゆっくりと大きな動作で伝えたり、ゆっくり話したりすることが1番伝わりやすく、大事だと感じた。また、子ども達に質問を問いかける際に、頷きだけで終わるような問いかけではなく、言葉が返ってくるよう、「どんな風に見える」や「みんなはどんな食べ物が食べたい」などといった質問をして、子ども達が考え、自分の思いを伝えるような問いかけにすることで、画面越しのコミュニケーションが図れていたと思う。予想していた子どもの姿と違うことでも、全員がアドリブを入れるなどといったように、臨機応変に対応していたため、きちんと会話も成立していて、良かったと思う。リハーサルの時と比べて、自分達の真似をしてほしいと思ったところは、一つ一つ子ども達に変身するといった言葉に言い換え伝えることで、より分かりやすくなったと感じた。子ども達に1つの質問を問いかけたら、100で返ってくるため、全部を拾って共感するのは難しかったと感じたが、子どもたちに手を挙げてもらったほうがもっとスムーズになったと思う。しかし、子ども達の反応も良く、自分たちも楽しんで出来たため、良かった。また、このことを通して達成感が得られたと思う。

【升永浩平】

今回の幼教子ども劇場がzoomで行うことになったため、子ども達に劇を通して、自分達の伝えたいことが伝わるのかとても不安だったが、自分が思ってる以上に、子ども達も一緒に楽しんでくれていたため、良かったと思う。また、卵から生まれてくる場面や蝶々が飛ぶ場面など、様々な場面で自分達が楽しんで表現活動を行うと、子ども達も楽しんで表現活動をしてもらえるのだと思った。子ども達にあおむしの気持ちを伝えるといったセリフや卵から生まれてくるように伝えるなどといった様々な場面で、子ども達も一緒に参加してくれるような言葉かけをすることを考えるのは難しいと感じた。このことを通して、子ども達への言葉かけやどのようにすれば楽しむことができるのかといった子どもの目線になって考えることの大切さを学ぶことができた。

今回の取り組みを通して得たことは、子ども達の意見を聴く力である。あおむしが卵から生まれてくる場面で、あおむし役の1人が子ども達に好きな食べ物を聞いた。その後、私が子ども達が好きな食べ物を一つずつ聴き取り、子ども達が言ってくれた食べ物を繰り返して言った。このやりとりをする中で、身振り・手振りを使ったり、うなずきや相づちを適度にしたりすることによって、子ども達に話を聴いていることを伝えられたと思う。また、子ども達の声が重なり、聞きづらい場面もあったが、子ども達の話聴いている姿勢を見てもらうことによって、子ども達も話しやすいと感じることができるのではないかと思った。このことを通して、これからも子ども達だけではなく、他の人と連携をとるためにも聴く力を大切にしていきたいと思う。